

①作業が終わってほっと一息、エド・アドの社員たち。②社員たちに指示を出す社長の小川茜さん。③貼り付け作業を進める社員たち。④左から、小川茜さん、中村望さん、井上教授、残間特任教授。



2018年 流山グリーン フェスティバル ステップアート

希望の未来へ羽ばたけ!



4月29日から5月4日まで、流山おおたかの森駅南口都市広場で流山グリーンフェスティバルが開催された。29日には、駅から広場を結ぶ階段に、江戸川大学の仮想広告会社「エド・アド」が、恒例のステップアートの貼り付け作業を行なった。(撮影: 添田一真 取材、文: 石井悠大)

エド・アドは社長社員を含めた全員がメディア・コミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科の学生だ。顧問は同学科の残間義和特任教授、井上一郎教授が務める。

14回目の同フェスティバルへの参加となる今年、ステップ・アートの貼り付けは社員の1年生5人と2年生1人、そして社長の3年小川茜さんで作業が進められた。

今年のグリーンフェスティバルのテーマは「未来へのギフト」。社員たちで企画会議を繰り返した結果、このテーマに合わせた

階段の段と段の間にテープ状になったイラストを印刷したシールを貼る作業は、二人一組になって進められた。ステップアートの貼り付け経験があるのは、小川さんと2年生だけ。そのため、1年生の社員たちは、最初は緊張した面持ちだ。

シートは丁寧に貼らないと階段のタイル面との間に空気が入って浮いてしまったり、しわがよったりして絵が歪んでしまう。

「本番は必ず成功させなければいけないと緊張していました。ここまで来ると2か月以上準備していたので、やっと一区切りついた気持ちです」と小川さんはほっとした様子だった。

イラストは小川社長が担当した。デザインの初期段階は完成したものとは違い、タカがリアルで怖い印象を見る人に与えていた。いくども残間先生、井上先生と小川さんでイラストのタッチや構成などを練り直し、さらに細かな微調整を加え、柔らかなアニメ風のステップアートとなった。

失敗が許されない、緊張の作業がはじまる

どこに苦労したのが階段の中央に何か所かある木製の踊り場の両側だ。左右から別のシールを貼るのだが、正面から見るときに絵がずれないように細かい微調整を繰り返していく。数十分もすると、作業になれてきたのか、社員たちからは時折笑顔がみえはじめた。緊張も解けはじめたようだ。

作業中から道行く人たちの注目を集めていたステップアートは、およそ2時間の作業で完了した。最終的には階段の端から端まで、横7.7メートル縦2.5メートルの巨大な一枚の絵となった。

「本番は必ず成功させなければいけないと緊張して